秋田魁新報　2024年12月30日付　地W右

大館桂桜高生「カフェ」企画運営

認知症患者 孤立させない

大館市の大館桂桜高校は、認知症患者やその家族らの孤立感、不安の軽減を目指す「桂桜カフェオレンジ」を開いている。生徒が市の認知症サポーター養成講座を受講したことがきっかけで企画。今年9月に始まったカフェの運営は今後も下級生に引き継がれていくという。

会話や演奏、笑顔で交流

今月12日、同校で開かれたカフェでは、生活科学科福祉コースの3年生7人が、訪れた高齢者ら9人と交流した。誰でも参加することができ、料金は200円。コーヒーや紅茶、抹茶が用意され、同校食物部が用意した練り切りも振る舞われた。来店客は高校生との会話を楽しみながらクリスマスリースを作ったり、1年生のハンドベル演奏に耳を傾けたりした。

同市外川原の女性(75)は認知症の夫(75)と一緒に参加した。9月も訪れたといい「家に2人だけだとけんかになることもあるので、高校生や地域の人と話せるとリフレッシュになる。次回もまた来たい」と話した。

昨年12月、生活科学科の3年生32人が市の認知症サポーター養成講座を受講。市が月1回開催している認知症カフェ「つながる」でのボランティア活動などを通し、自分たちもカフェを運営し地域に貢献したいと動き出した。

今年9月に第1回、10月に第2回を行い、コミュニケーションの取り方やタイムスケジュールなどの改善点をその都度共有。認知症患者らの過ごしやすさにこだわってきた。

「店長」として運営を統括した木村颯さん(3年)は仙台市の専門学校に進学予定で、将来は作業療法士として大館市で働くことが目標だという。「回を重ねるごとに皆さんが楽しむ様子が増えてよかった。コミュニケーションの仕方がとても大切で、自分の将来にも生かせるような貴重な経験になった」と語った。

次回は来年2月を予定。2年生が主体となって運営し、3年生はサポート役としてノウハウを伝える。担当する非常勤講師の渡部洋子さんは「今後も継続し、認知症の方やその家族の方などが気軽に立ち寄れるような地域に開かれた場所になれば」と話した。

(間杉大旗)

会話を楽しみながらリースを作る参加者と高校生

©秋田魁新報社